

長野県の野外舞台建築物の実態と保存、活用に関する調査

野外舞台建築物に関する計画的研究 その1

A SURVEY OF THE ACTUAL CONDITIONS, PRESERVATION
AND UTILIZATION OF OUTDOOR STAGE "PLAYHOUSE"
IN NAGANO PREFECTURE

A systematic study of the outdoor stage "playhouse", 1

山下恭弘*, 松本直司**, 谷口汎邦***

Yasuhiro YAMASHITA, Naoji MATSUMOTO and Hirokuni TANIGUCHI

In this paper, a survey of the actual conditions, preservation and utilization of outdoor stage "playhouse" in Nagano prefecture is described.

The study consists of two parts: one is a study of the actual conditions of outdoor stage "playhouse"; the other is a summary of the questionnaire in respect of the preservation and utilization of "playhouse".

From the former study, the characteristics of the outdoor stage, comprising a stage, a dressing room and audience seats, became clear. This structure, which provides a "Tayuza", "Niju", "Seri" and so on, is quite different from ordinary structures.

The study in this time shows that the number of outdoor stage "playhouse" has increased by two times since the last survey, and also indicates that the preservation and maintenance of such outdoor stage is becoming difficult because of decreasing audiences in Nagano prefecture.

Finally, the above survey describes the following conclusion;

- 1) At this moment "Oshika Kabuki" and "Kuroda marionette" performances can be seen in some parts of the region, but the traditional performances should be available in all regions.
- 2) For this purpose it is essential to make a plan for preserving and utilizing the outdoor stage as places of communication, information exchange and education of local inhabitants.

Keywords : outdoor stage, actual condition, preservation, utilization, playhouse

1. はじめに

日本各地の神社には、一般の神楽殿とは異なる特殊な形態の舞台を持つものがある。そこでは地芝居や人形芝居が行われ、人々の娯楽の中心あるいは唯一の社交の場となっていた。これら野外舞台建築物は、回り舞台やセリなど舞台機構を備えたものも多く、全国各地に庶民の文化として発展した。しかし、この全容が明らかにされないまま年々減少してきており、舞台の有効利用や貴重な文化遺産を保護するためには早急な専門的調査を行う必要がある。

野外舞台は、神社の舞楽舞台を発展させたものと歌舞伎の流れをくむ地芝居を行うものに分けられる。

都市の歌舞伎は、幕末には退廃期を迎え、明治に入っ

て活歴劇や散切劇から、新歌舞伎、新派、新劇などに分岐して発展していった。一方、地方では江戸中期頃から、歌舞伎の流れが浸透し始めて文化文政の頃最盛期を迎えた。現在長野県に見られる野外舞台建築の多くは、江戸後期から明治初めに建てられたものである。そこでの地芝居は当時各地で盛んに行われていたが、ラジオ、テレビなどマスメディアの普及、地方文化の中心が学校、公民館、各種設備を持った集会場などに移ったこと、若者が職を求めて村、町を出て地方の過疎化が始まってきたことなどが原因となって、衰退の一途をたどって現在に至っている。それに伴い農村に多く見られる舞台建築も年々減少し、現存するものも利用されずに放置されたままとなっているものが多い。

本報告は、参考文献(8)~(10)を発展させて内容を充実させ加筆、再編したものである。

* 信州大学 教授・工博

** 名古屋工業大学 助教授・工博

*** 東京工業大学 教授・工博

Professor of Shinshu University, Dr. Eng.

Associate Professor of Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

Professor of Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

長野県は野外舞台建築物が多く分布しており、一時期調査研究が行われたが、近年は地域の歴史資料研究家の調査報告が時折ある程度である。

本研究は、このような野外舞台建築物をその地域の手軽な情報発信、伝達の場合、コミュニティ活動の場合、生涯教育の場合と位置づけるにはどのようなことが必要条件なのかを探るために保存、活用、および地域施設としての再生に着目して調査を行い、長野県の野外舞台建築物の現状を明らかにすることを目的としている。そのために数例の舞台の現地調査を行い、問題点などを抽出した後行政に対して舞台建築物の現状と保存、活用に対する取り組み状況等についてのアンケート調査を行った。次にこれらの結果から建築計画的に保全、活用の条件を明らかにするために現地調査を行った。研究は、次の手順で行う。

1. 野外舞台関連研究資料の調査
2. 野外舞台建築物に関する基礎事項の整理
3. 野外舞台の存廃、保存、活用に関するアンケート調査
4. 野外舞台建築物の現地調査

2. 野外舞台建築物研究の背景および関連資料

2.1 野外舞台建築物研究および資料

舞台に関する研究は、昭和初頭から20年代にかけて、いくつかの論文が発表されているが、竹内¹⁾は民家調査のおりに見かけた野外劇場らしきものに興味をもち昭和8年(1933)に徳島県の舞台の実測調査を行っている。この野外劇場を原始舞台としてその研究成果を発表している。その後、関係分野での専門家の独自の研究論文が出され、特色ある舞台が報告されているが、継続的な研究調査には至っていない。

昭和30年代になると松崎による全国的な調査、および各地の地元研究者による局地的な調査が行われた。松崎²⁾は全国の市町村を対象にアンケート調査を行い、全国にわたる約800棟の舞台リストと分布、群、系列、機構などを体系的にまとめた。これより野外舞台建築物の広範で高密度な分布の様子が少しずつ明らかにされ、舞台研究の基礎が確立された。

昭和40年代には角田³⁾によってさらに綿密な調査が行われた。ここでは未踏査地の分布状況、存廃の実態、地方的特性の把握、さらに資料価値の高いと目される舞台の調査が行われている。ただ、この段階でも未踏の地は広大に残され、分布調査に終止符を打つには至らなかった。その後、研究は局地的に進められ、教育委員会等の手による舞台調査がある⁴⁾程度で、以後、建築学での舞台建築物に関する研究論文は現在のところ見ていない。

これまでの調査によると野外舞台建築物の総数は

2000棟にも及び、密度の高い県は①徳島県②長野県③岐阜県④愛知県⑤兵庫県⑥高知県の順になっている。野外舞台建築物はほぼ全国的に分布しているが、その全容をつかむには、地元での足の調査が不可欠である。

2.2 野外舞台建築の用語

松崎は論文で初めて農村舞台という名称を用いている。この用語についてはいくつか異論がある。それは、“農村”という言葉が極めて限定された地域を指すことで、調査研究が進むにつれて町や漁村にも存在することがわかってきた。また“舞台”という言葉も、本来は劇場の一部分を指すものであって、この野外劇場を舞台というのは一般的用語と合致しない、などである。

角田もこれらの理由を挙げながらも、すでにその時期一般的に用いられるようになっていた“農村舞台”の名称を襲用している。

一方、竹内は、岡山県で野外劇場を“野舞台”と呼んでいる用語を用いている。その後これら用語に対する議論を見ていない。本研究では建築計画の面から特に“農村舞台”、“野舞台”と特定する必要がないので、野外舞台建築物と表現することにした。

2.3 長野県の野外舞台に関する研究

前述のとおり長野県は建築年や分布密度から、野外舞台の研究上貴重な地域と考える。特に回り舞台としては小県郡丸子町の西内の舞台(文化9年1812年)や小県郡東部町の祢津西町の舞台(文化13年1816年)などが現存し、東部町では芸能を復活させようと地元の気運が高まっている。また下伊那郡大鹿村の大鹿歌舞伎や、下伊那郡上郷町下黒田の人形芝居などは現在でも昔ながらの芸能が引き継がれている。

長野県の野外舞台に関する研究は、藤島⁵⁾と、与良⁶⁾らが最初である。その後、松崎や角田らの調査で実態がわかってきた。これらの調査によれば長野県の舞台群は、①上田市とその周辺の千曲川上流域および大町市とその周辺の北安曇地域、②伊那市、飯田市を中心にした天竜川上流域、の2つの地域に大別される。またその分布は高密度であり、部落の各神社で1棟ずつ所有するほどである。

その後、丸山⁴⁾により丸子町西内平井の舞台の寄進札(文化9年1812)を見いだされ、野外舞台としては古い時期の建築物であることを示すなど、熱心な郷土史研究家の努力によって、舞台の存在が一般に徐々に知られるようになってきた。このほか大河⁷⁾による生島足島神社内の回り舞台をもった完全な舞台建築の復元がある。

3. 野外舞台建築物の存廃、保存、活用に関するアンケート調査

3.1 調査の概要

アンケート調査は、野外舞台に備わっている機構、構

造、形状を図解で示した上、舞台の存在の有無、存在している場合は舞台の使用状況、舞台をどのように保存し活用しているのか、また行政側の方針や、地元の意向について調べることを目的として、長野県内の各市町村教育委員会にあてて配布した。調査時期は昭和61年11月～12月の1か月に行った。

調査内容は次のようなものである。

a) 舞台などの文化財担当機関に対する質問

舞台の有無、舞台の保存や活用の方針、各市町村内の神社の列記。

b) 各舞台についての質問

所在地および舞台のある神社名、あるいは場所名、現存しているか否か、建物の形状、配置形態、舞台の呼称、昔の芸能、建築年の資料や舞台に関する記載図書の有無、舞台機構、現在の用途、今後の保存活用の意向、管理者、舞台について知る年配者などの有無。

なお、各々の舞台については松崎、角田らによる舞台リストをもとに、一舞台について一枚の調査票を作成し、その他に舞台があれば新たに調査票を追加して記入を求めることによって、全県的に漏れなく把握されるようにした。さらに、舞台はそのほとんどが神社境内にあることから、舞台の有無にかかわらず市町村内のすべての神社の列記を求めた。

回収方法は、調査票に同封した返信用封筒で返送する方式としたが、舞台数が特に多く10棟以上にのぼる市町村については、調査員が出向き直接受け取ることにした。

調査票の回収率は121市町村のうち106(87.6%)で、このうち全く舞台がない、あるいは不明と答えたのは30市町村(24.8%)であった。また、これ以前の調査で舞台があがっているのは45市町村であったが、新たに舞台保有が報告された市町村は34にも達した。したがって、未回答も含めて市町村単位でみた舞台保有率は65.3%、79市町村となった。

3.2 長野県の舞台建築物の状況

(1) 舞台の総数と分布

県下の舞台建築物を集計した総数は457棟である。分布の集計に当たっては、長野県統計書の分類にしたがって、①佐久、小県地区、②諏訪地区、③伊那、飯田地区、④木曾地区、⑤松本、南安曇、東筑摩地区、⑥大町、北安曇地区、⑦長野、高井、水内地区の7地区別とした。これによると③伊那、飯田地区は、169棟と他の地区より著しく多く、次いで①佐久、飯田地区と⑤松本、南安曇、東筑摩地区、⑥長野、高井、水内地区が約80棟存在している、もしくはかつて存在したことになる。松崎、角田、与良らの調査でわかっている舞台数は231棟であったが、不明な舞台は9棟であった。新たに報告された舞台は235棟である(表-1)。この数は今のところ他

表-1 現存している、あるいはかつて存在していた地区別の舞台建築物 (単位:棟)

地区番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	全体	
既調査 舞台数	数	65	0	135	0	4	24	3	231
	票	4		2		0	3	0	9
	小計	61	0	133	0	4	21	3	222
新舞台	20	21	36	11	80	54	13	235(51.4%)	
合計	81	21	169	11	84	75	16	457	

*備考 地区番号①佐久、小県地区 ②諏訪地区 ③伊那、飯田地区 ④木曾地区
⑤松本、南安曇、東筑摩地区 ⑥大町、北安曇地区
⑦長野、高井、水内地区

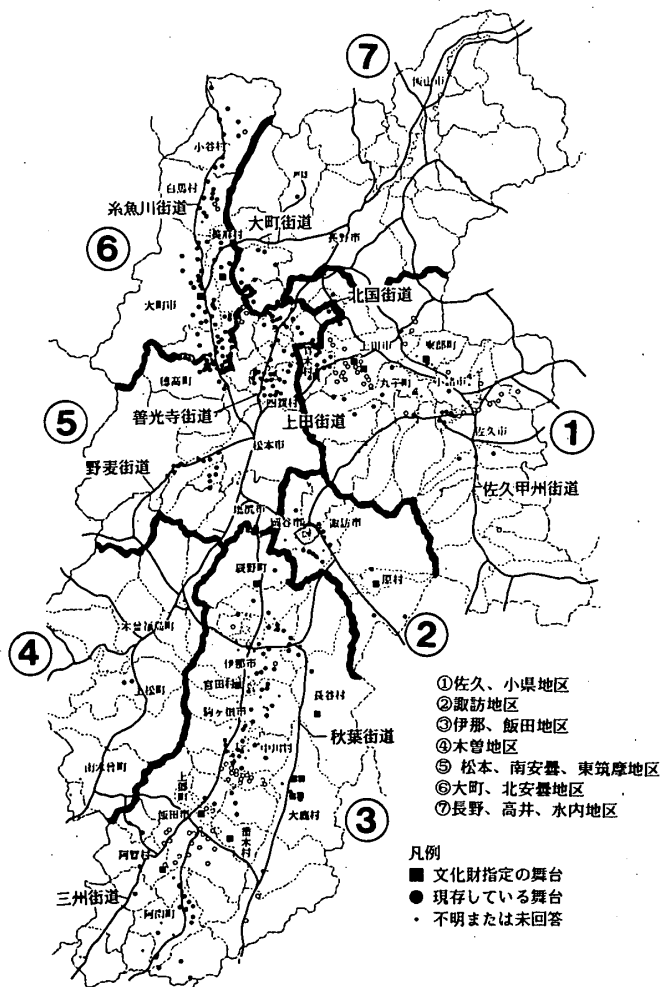


図-1 長野県の野外舞台建築物の分布

県に例を見ないものである^{註1)}。

舞台の分布状況は図-1のようになる。松本市から木曾郡にかけては疎らで、長野市より北東部にはほとんど見あたらない^{註2)}。また、公用の道であった中山道沿いは疎らであるのに対し、糸魚川街道、大町街道、善光寺街道、松本上田街道、および三州街道から遠州街道にかけてのいわば生活の道であった地方的な街道沿いに密集していることがわかる。これは当時、しばしば発布された芝居禁止令のため公用の街道近くには建築されにくかったこと、したがって長野市などの天領地では存在しにくかったことなど、野外舞台発達に大きく影響していると

表—2 舞台建築物の存廃の現状 (単位:棟)

地区番号 舞台数	① 81	② 21	③ 169	④ 11	⑤ 84	⑥ 75	⑦ 16	全体 457
現存	48	12	76	8	79	67	14	304(66.5%)
廃絶	焼却		1	2	1	1		5(1.1%)
	解体	9	6	38	2	1	1	58(12.7%)
	移築	1		1			2	4(0.9%)
	売却	3		3				6(1.3%)
	その他	2	1	6		2	2	13(2.8%)
計	15	8	50	3	4	5	1	86(18.8%)
不明	18	1	43	0	1	3	1	67(14.7%)

*備考 ①～⑦は地区番号を表す。以下の図表で使用する。

松崎が述べているが、これを再度検証する結果となった。

(2) 舞台の存廃状況

回答のあった舞台のうち現存しているものが304棟で舞台総数の66.1%、廃絶したものが86棟18.8%となり、予想以上に存在していることが明らかになった(表—2)。一番多く舞台がある、あるいはかつて在ったことが分かった③伊那・飯田地区は、このうち76棟の現存が確認され、残りは解体、あるいは不明となっている。この地区は、歌舞伎、人形芝居などの伝統芸能そのものを積極的に復活させて注目されている^{註3)}。それに対して⑤、⑥地区は、廃絶した舞台数が少なく、ほとんどが現存している。次いで①は約半分の48棟が現存していることになる。

(3) 舞台の位置関係

神社境内における舞台の配置を竹内の分類に従って集計した結果を表—3に示す。④木曾地区、⑤松本、南安曇、東筑摩地区で4型より3型が多く、③伊那、飯田地区では、3型より4型が多い。その他の地区では3型と4型がほぼ同じ比率になっているが、県下は概して3型、4型が多く、1、2、5型はごくわずかである。すなわち、回答のあったほとんどの舞台は本殿と分離している。

1、2型の形態では、舞台は拝殿や神楽所を兼ねることになる。それに比べて3、4型の形態は、拝殿との兼用

表—3 舞台と神社本殿との位置関係 (単位:棟)

地区番号 舞台数	① 81	② 21	③ 169	④ 11	⑤ 84	⑥ 75	⑦ 16	全体 457
1	3	1	3	1	2			10(2.2%)
2	5		6	1	3	1		16(3.5%)
3	18	6	15	5	51	33	5	133(29.1%)
4	12	5	43		18	32	6	116(25.4%)
5	1		3					4(0.9%)
その他	4	2	7	1	7	4	2	27(5.9%)
無関係	1				1			2(0.4%)
不明	37	7	92	3	2	5	3	149(32.6%)

もほとんどなく、舞台で芝居や歌舞伎を気兼ねなく演ずるのにとっても好都合な位置関係である。舞台の配置、舞台の規模、舞台の形状等については、現地調査をもとに次章でまとめることにする。

(4) 管理者

現存している舞台は、地区の過疎化、高齢化に伴って舞台の管理が難しくなっている。表—4は舞台の管理者についての集計である。地区住民が149舞台(54.6%)、氏子総代が74舞台(27.1%)、ついで区長が31舞台(11.4%)、宮司、神社が9舞台、公民館、資料館が2舞台となっていることから、舞台の管理は行政側ではなく地区住民か氏子代表が主体となっていることがわかる。

3.3 舞台建築物の使用状況

(1) 現在行われている、あるいはかつて行われた芸能

現在、利用されているか、あるいはかつてそうであったと考えられる舞台で行われていた芸能について重複回答した集計を分類してみると、歌舞伎、人形芝居は、歌舞伎が56例(12.3%)であり、人形芝居が9例(2.0%)の56舞台が利用されている(表—5)。ただ、人形芝居は、伊那、飯田地域に限られており、歌舞伎は②諏訪地区を除いた地区で行われている、もしくは行われてた。一方、神楽にも利用されており、全回答数の約20%になる。その他の利用している、あるいはかつて利用した芸能をみると、内容は地芝居、村芝居、余興、演芸、映画の上映など多用途にわたる。その中でも地芝居、村芝居などを含めた芝居が圧倒的に多く、152件中124例を数える。全体的に舞台の用途は、歌舞伎、芝居、余興、映画、演芸といった娯楽的な芸能と神楽、獅子舞といった祈願、神事芸能に分けるとおよそ2:1の比率となる。

(2) 現在の舞台の使用状況、および保存と活用の状況

現存している舞台のうち、現在何等かの形で使用されている舞台は、全体の50%である。そのうち約25%が芸能継続として利用している(表—6)。近年③伊那、

表—4 舞台建築物の管理主体 (単位:棟)

地区住民	区長	氏子総代	宮司・ 神社	公民館 資料館	その他	計
149	31	74	9	2	8	273
54.6%	11.4%	27.1%	3.3%	0.7%	2.9%	(100%)

表—5 舞台で行われる芸能 (単位:棟)

地区番号 舞台数	① 81	② 21	③ 169	④ 11	⑤ 84	⑥ 75	⑦ 16	全体 457
歌舞伎	7		23	3	14	7	2	56(12.3%)
人形			9					9(2.0%)
神楽	13	4	24	3	33	18	5	100(21.9%)
その他	8	7	51	0	50	32	10	158(34.6%)
不明	54	10	81	6	7	34	2	191(41.8%)

(重複集計)

表一六 現在活用している主用途 (単位:棟)

地区番号 現存舞台数	① 48	② 12	③ 76	④ 8	⑤ 79	⑥ 67	⑦ 14	全体 304
芸能継続	6		18	3	25	19	2	73(24.0%)
社務所	1		5		1			7(2.3%)
集会所等	4	1	10	3	2			20(6.6%)
祭等の行事	7	3	11	1	18	11	1	52(17.1%)
用途なし	15	3	17		27	8	8	78(25.7%)
その他		4	6		11	5	2	28(9.2%)
不明	15	1	12	3	2	24	2	59(19.4%)

飯田地区に見られる大鹿村の大鹿歌舞伎や下伊那郡上郷町の黒田人形芝居、下伊那郡阿南町の早稲田人形芝居などは、盛んに行われ、全国的、世界的に注目されて今や地区の活性化の中心になっている。その他の地区でも歌舞伎など復興の動きが盛んになってきている。特に①佐久、小県地区の東部町や上田市などでは、かつての芸能を復活させようとする地元の気運が高まってきている。

その他の内容は、祭等の行事、集会所等のような地区の寄り合いの場としての利用とか、卓球など青少年の利用の場、あるいはその地区の資料館、休憩所、神社関係の物置などの利用が挙げられている。

一方、保管のみとか特に使用していない等の舞台が約35%ある。これは舞台の老朽が激しくて使えないとか、屋根のある集会場があるので、特に使っていない等によると考えられる。

3.4 行政の対応

ではこのような舞台の利用、活用に対して行政側の対応について舞台を保有している地区を重複集計してみると、74市町村のうち「積極的に努力している」と「検討中」を合わせると25(約25%)の市町村が保存、活用に目を向けているのに対して、「特に考えていない」が30市町村(約40%)が利用、活用に関心がないことが伺える(表一七)。したがって行政側の回答数も長野県121市町村の内、舞台が現存する74市町村の回答である点を考慮しても現時点では行政側の対応がよいとは言えない。原因の一つに舞台の管理主体が地元住民であるため、適切な対処がされにくい面があることが挙げられる。

表一七 行政側としての保存、活用方針 (重複集計) (単位:市町村)

地区番号 市町村数 回答数 うち舞台保有	① 27 23 16	② 6 5 5	③ 29 27 25	④ 11 8 4	⑤ 19 16 12	⑥ 7 7 6	⑦ 22 19 6	全体 121 105 74(100%)
積極的	3	1	6				1	11(14.9%)
検討中	2	3	6		2	1		14(19.0%)
特になし	5	1	7	2	8	3	4	30(40.5%)
その他	3		2	2	1			8(10.8%)
不明	3		4		1	2	1	11(14.9%)

表一八 地区住民側の今後の舞台建築物の保存、活用方針 (単位:棟)

地区番号 舞台数 回答数 うち現存数	① 81 68 48	② 21 21 12	③ 169 147 76	④ 11 11 8	⑤ 84 84 79	⑥ 75 73 67	⑦ 16 16 14	全体 457 420 304(100%)
使 用	芸能復活	1		1	6			8(2.6%)
	祭・行事	12	1	26	2	39	30	114(37.4%)
	その他	1	1	10		1		13(4.3%)
	計	14	2	37	8	40	30	135(44.4%)
その他		3	4		7	6	1	21(6.9%)
使用せず	13	6	21		27	7	7	81(26.7%)
不明	21	1	14		5	24	2	67(22.0%)

3.5 今後の舞台の保存、活用

次に現存している舞台のある地元では「祭に使用したい」37.4%を含めて、何等かの用途で利用したいという声が44.4%と強い点である。その他の使用として舞台廃絶や神社など宗教組織に管理を任せるといったものが挙げられる。

ここで注目することは、現存する舞台利用法として「祭りや行事に使用したい」が37.4%と最も多く「芸能復活は8舞台(2.6%)となっている(表一八)。確認された457棟の舞台でみると(表一五)、歌舞伎、人形芝居など芸能に使われている、あるいはかつて使われた舞台は64例(約14%)である。したがって、かなりの数の舞台が廃絶か、もしくは現在利用していないことになる。

一方、保管のみとか、とくに考えていないといった「使用せず」の回答も81舞台(26.7%)あることである。行政の具体的な動きとして舞台の文化財指定がある。現在までの指定は19棟である。これにより舞台建築の保存と言った点では意義のあることになるが、実際の活用に対して積極的な行政側の対応が必ずしもなされていない面がアンケートから明らかになった。

4. 現地調査

アンケート調査により、長野県の野外舞台の存廃、保存、活用、建築の形状、配置などが明らかとなった。次のステップは、保存、活用に向けた野外舞台の存在を明らかにすることである。ここではアンケート調査を実施するに当たり事前調査した①地区の現存舞台の実態について調査した結果と、アンケート調査後の⑤地区内の東筑摩郡麻積村を対象として調査した結果についてまとめる。

調査方法は、1)舞台の実測調査(図面、写真などによる記録)、2)聞き取り調査(昔の芝居の様子や現在の使用状況)、および3)資料の発掘調査(古文書や昔の記録、棟札や寄進札など)を中心に行った。調査時期は①地区を昭和61年9月~10月に、⑤地区を昭和62年5月~6月であった。なお、東筑摩郡麻積村は既往の調査では、未調査地区であったが、前述のアンケート調査

で多くの舞台が報告された地域である。

4.1 分布および現状

まず、①地区の分布と現状であるが、現在 76 舞台あって、上田街道、佐久甲州街道沿いに分布している。調査した 6 舞台の内、生島足島神社境内にある舞台は昭和 61 年に文化財として指定され、柿落しに大鹿歌舞伎が上演された。また東部町の祢津西町の舞台は、地元の子供たちも出演する真田歌舞伎を上演するなど、地道な活動を続けている。舞台機構も手入れすれば、現在も十分使用できるものである。

次の⑤地区内の麻積村の野外舞台は常設舞台 10 棟(全て神社境内)と組立舞台 1 棟(上町、法善寺)が現存しており、分布は全村域にわたっている。麻積村は 12 の神社があり、ほとんどの神社に舞台があることになる(図-2, 3)。人口はおよそ 3700 名で一神社当たり約 300 人である。これは長野市内におよそ 270 の神社があり、神社当たり約 1300 人となるので約 4 分の 1 である。村の人口が過疎化によって減少しているとはいえ、神社の存在は大きい。

舞台の活用、利用を調べると、上町の組立舞台は毎年 9 月の祭り時に芝居や余興に使われている。その他の舞

台では神事が終わった後の直会に使う程度で、祭りの余興等は、各地区にある公民館がその役を担っている。しかし、現存している舞台のほとんどが神社境内敷地内にあることから神社を支える氏子組織によって屋根補修や基礎の補強等なんらかの手入れがなされており、自然崩壊をまぬがれていることなどが明らかになった。

4.2 建築形態の特徴

今回現地調査して測量した舞台の一例を図-4、写真-1 に示す。太夫座は上下両方、上手のみ、あるいはない場合がある。両地区の舞台はいずれも舞台内にあるが、舞台の外につき出ているものもある。花道は常設されている舞台はないが、組立式になっている。

客席は舞台前面の地面が使われ、麻積村のような山間地では、神社は小高いところに位置しているので客席は舞台に向かっての上がり傾斜をうまく利用している(図-5)。楽屋は、一般には奈落が使用されたが、二重の後方から舞台の後壁までのほぼ 1 間の所や、舞台裏手に幕を張って仮設したなど、様々なところを楽屋として使用されたことがわかった。

舞台建築は、舞台内部の柱が省略されており、残って



図-2 麻積村の位置

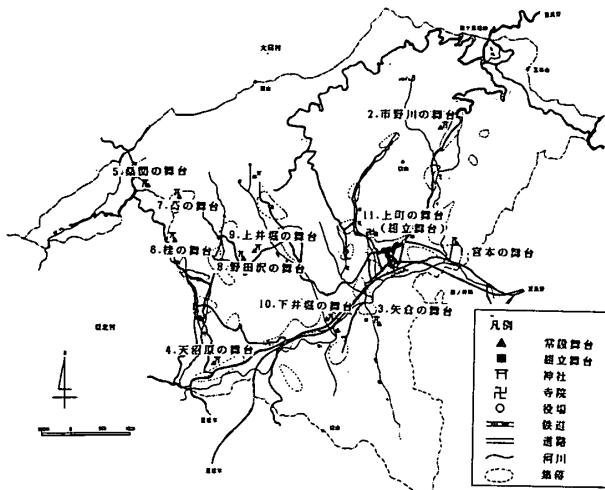
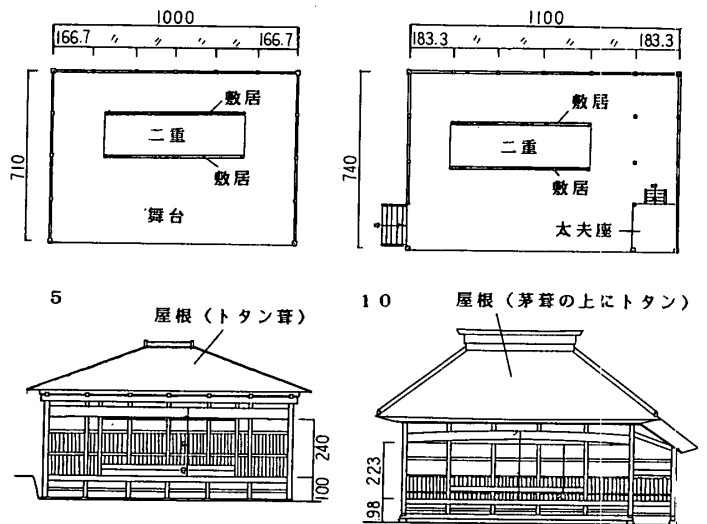
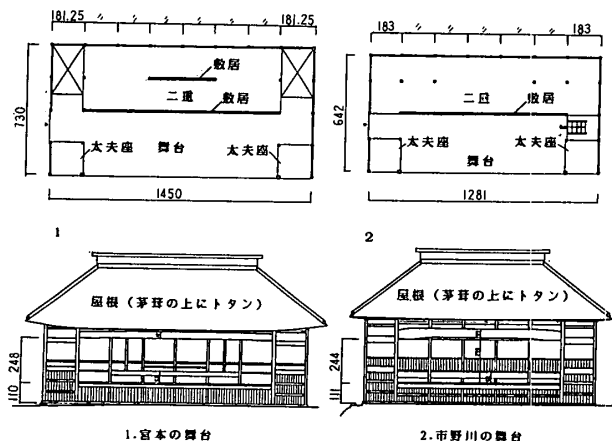


図-3 麻積村の舞台建築物の分布



5. 桑園の舞台

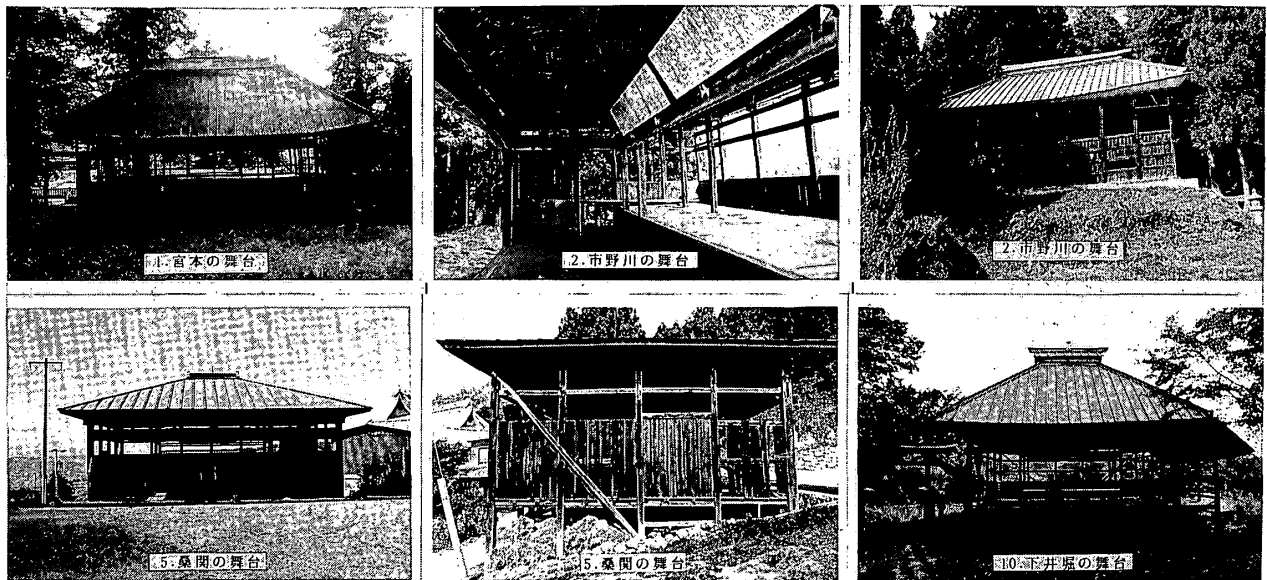
10. 下井堀の舞台



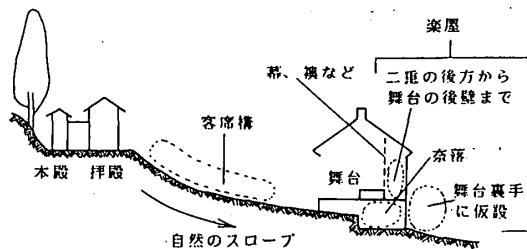
1. 宮本の舞台

2. 市野川の舞台

図-4 現地調査した舞台建築物の一例



写真一 現地調査した舞台建築物



図一五 舞台と楽屋、観客の位置

いる内部の柱は固定二重や大臣柱を兼ねるようにしているなど他の建築物と異なる構法で発達したものと考えられる。

野外舞台には、一般に舞台、楽屋、および野外の客席で構成され、太夫座、二重、花道、セリ、回転、床面拡張機能、遠見などが備わっている。太夫座は義太夫節やおはやしなどを行う場所であり、二重は舞台床より高く床を作る必要があるとき、組み上げるものであって、固定式と移動式のものがある。また花道は役者と観客との親近間を高める役割を持つもので、舞台の下手に取り付けられ、歌舞伎上演のために必要不可欠なものであり、上演時は仮設して使ったようである。麻積村の舞台には無いが、セリ、回転は舞台転換装置として歌舞伎舞台において特筆されるものである。回転機構は、地方のその時代の建築技術の結晶でもあり、都市においては技術が年々進歩し改造されていっても地方では、そのままの当初の形が残されたと考えられる。床面拡張機能は、通常壁体の一部となっていて上演時に床面を拡張させるものである。遠見は、背景と同意味で使われ、遠くの景色を描いたものである。①地区の舞台はほとんどが舞台後方の一部分が大きな窓のように開放されており、自然の景観を一種の背景として取り入れるためのものである。いずれも野外舞台特有のものであり、その仮設性と立地条

件をよく表している。

両地区の舞台の特徴をまとめて表一9に示す。舞台形状として開口寸法と奥行き寸法でみると、①佐久、小県地区の舞台は⑤の東筑摩郡麻積村の舞台に比べて大きい。開口寸法は前者は8間が大半であるのに対して、後者は6間が多く、奥行きも前者は5間に対して、後者は4間となっている。これを舞台数、開口×奥行き寸法の関係を表すと(図一6)、両者の規模の違いが分かる。前者の舞台が回り舞台となっているため、舞台床面積が大きくなっているのであろう。次に屋根形状を見ると寄せ棟が多いことが分かる(図一7)。屋根材料は盛んな当時と異なり、トタンがほとんどとなっているのは、維持が大変なことを物語っていると言えよう。野外の客席は自然の地形をうまく利用して舞台に対して幾分傾斜している例が多い。次に神社境内の舞台の配置は、アンケート調査の結果どおり、3型の舞台と本殿が離れた配置となっているため芝居や歌舞伎が演じやすくなっている。

5. 保存、活用に向けて

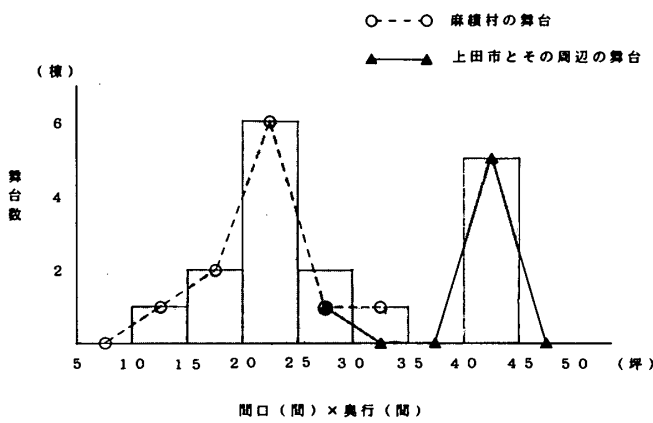
野外舞台は、かつて庶民の娯楽であり、かつ社交の場であったことは今回のアンケート調査、および実地調査で改めて分かった。

現存する舞台の大半は神社境内にあるためその地区の集会の場、信仰の場として守られてきた。そして、それが激変してきた時代の流れの中でも細々であるが伝統芸能を継続する施設として存在があったとみるべきである。しかし、用途を失った舞台は朽ちる一方であり、地区住民の重荷になってきている。原因として氏子数の減少や、地区の結び付きの薄れ、娯楽の多様化などが挙げられる。また、地域の氏子などの管理となっていること

表—9 現地調査した舞台建築物の特徴

No.	舞台所在	舞台形状			神社境内の環境		舞台機構			
		間口×奥行	床高	奈落	配置関係	観客席の傾斜	二重高さ	回転の直径	セリ	遠見
1	東部町 祢津西町	8間×5.5間	75	○	4型	無し	○	5.41m	3ヶ所	○
2	上田市 下の郷(生島足島)	9間×5間	70	○	6型	無し	○	4.90m	2ヶ所	○
3	丸子町 西内平井	8間×5間	113	○	3型	有り	×	7.40m	2ヶ所 ¹⁾	△ ²⁾
4	丸子町 西内高梨	8間×5間	119	○	3型	無し	○	7.40m	×	○
5	青木村 沓掛	8間×5間	106	○	4型	無し	○	7.10m	×	○
6	青木村 下奈良本	8間×4.5間	89.5	○	3型	有り	×	×	×	○
7	麻績村 宮本	8間×4間	108	○	3型	有り	62cm	×	×	×
8	麻績村 市野川	7間×4間	111	○	3型	有り	62cm	×	×	×
9	麻績村 矢倉	5間×4間	107	×	3型	無し	49cm	×	×	×
10	麻績村 天沼原	6間×4間	97	×	3型	有り	46cm	×	×	×
11	麻績村 桑岡	6間×4間	100	○	3型	無し	40cm	×	×	×
12	麻績村 桂	4間×3間	96	×	3型	有り	44cm	×	×	×
13	麻績村 高	5間×3間	110	○	3型	有り	46cm	×	×	×
14	麻績村 野田沢	6間×4間	122	×	3型	有り	47cm	×	×	×
15	麻績村 上井堀	6間×3.5間	130	○	3型	有り	44cm	×	×	×
16	麻績村 下井堀	6間×4間	98	○	3型	有り	55cm	×	×	×
17	麻績村 上町	6間×約3間	-	-	-	無し	組立式	×	×	×

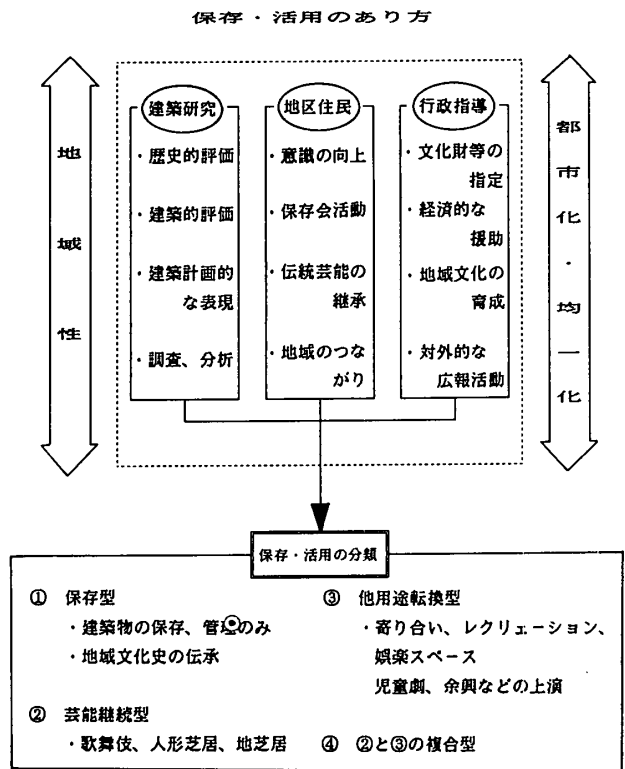
1) セリは回転の中に2ヶ所。
 2) 遠見らしき窓はあるが、舞台の後ろは幕で覆い楽屋にしたというから、その機能があったか定かではない。
 注) 17.上町の舞台は組立式である。



図—6 舞台の規模



図—7 舞台の屋根形状



図—8 舞台建築物の保存、活用のあり方

が行政側の積極的な活用を阻んでいるとも考えられる。
 活用上の問題として天候に左右されやすく予定が狂うなど不便であることとか、利用できるように改造すると文化財にならなくなると言ったことが挙げられる。

現存している舞台建築物は、今後必ずしもすべて保存する必要はないが、これを活用して保存できれば現状より良い方向に向かうはずである。それには3つの視点

考えられる(図—8)。まず研究面での客観的視点である。これには舞台の調査、発掘、建物の歴史的、建築的評価、建築計画的な手法による地域への提言などの活動である。次に地域住民からの視点である。地元の祭りや行事の際の地域施設としての積極的な活用、歌舞伎、人形劇の伝統継承、意識の向上などの活動がある。最後に行政からの視点である。舞台に対する各種指定、規制の制定、保存活動への財政援助、観光、文化資源としての対外的

な広報などの活動がある。また、これら三つの視点は相互に連携を取り合いながら存在し、これらの適切な調和により舞台の保存、活用が進めば望ましいと考える。そして舞台の保存、活用が現在の都市化、均一化と言った流れの中で、どのように舞台が各々の地域の中へ融合していくかは、これからの調査研究によるものと考えられる。

舞台の保存、活用を支える基盤は、やはり地元の人々の積極的な取り組みと行政側の文化財保存としてだけでなく、そこでの芸能そのものの保存などの制度の柔軟性のある取り組みが不可欠である。それは舞台の本来の用途である芸能の継続、復活である。芸能の継続は難しい課題であるが、舞台本来のあり方としては単なる保存にとどまらず“村民の共有財産”として生きた保存のための有効な活用策を見いだしていかなければならない。また、野外舞台建築物を地域の情報発信伝達の間、コミュニティ活動、生涯教育の場などに活用を計ることが貴重な資産の保存、活用につながることになる。

舞台建築物の現地調査、アンケート調査を通じて明らかになったことは、改めて伝統施設の保存、活用をどう扱うか、そして伝統芸能などの継承という形での根強い力をどう生かすか等を考えて、そこに展開の糸口を見いだすことである。そして、消えつつある舞台建築に対する課題を現代社会の中にもどのように取り入れるかを実際の事例報告だけでなく意識、地域性などの総合的視点よりそのメカニズムを解明することが今後の課題である。さらに、これにより具体的な地域にあった保存、活用への方策を提言することである。

謝 辞

研究は、長野県内市町村の教育委員会の積極的な協力によって、まとめることができましたことを付記し、感謝します。調査、解析等は信州大学、昭和61年度卒論生、林 静君、昭和62年度卒論生、西田秀雄君、中谷隆秀君の卒業論文の一部であることを付記し、感謝します。また、図表の整理等には信州大学大学院生戸嶋 進君の協力を得ました。感謝します。

注

- 1) 舞台とは、地芝居、買芝居を上演する施設としたので神楽殿等を含めて回答している場合がある。
- 2) この点はアンケートの回収にも関係するのでデルファイ法による再度のアンケートを予定している。したがって今後この地域の舞台建築物の存在が明らかになる可能性がある。
- 3) 伊那、飯田地域区ではこの数年来地域の活性化を一環として人形芝居の国際化をはかった企画を展開してよい結果を見せている。

参考文献

- 1) 竹内芳太郎：野の舞台，ドメス出版，昭和56年
竹内芳太郎：日本劇場図史，壬生書院（1935）
- 2) 松崎 茂：日本農村舞台の研究，刊行論文刊行会，昭和42年
松崎 茂：農村歌舞伎舞台の性格と分布，芸能復興第13号，民俗芸能の会，昭和32年(1957)
- 3) 角田一郎編：農村舞台の総合的研究，桜楓社，昭和46年
角田一郎：農村歌舞伎研究の手引，芸能史研究 No. 20，1968.1
- 4) 丸山知志：西内の廻り舞台，上田小県，小県上田教育委員会，S57.9，S58.3，S59.7，長野県民俗の会通信49号，S57.5(1982)
- 5) 藤島玄治郎：長野県小県郡津村の歌舞伎舞台，信濃，Vol.4，No.9，昭和27年，信濃郷土史研究会
- 6) 与良 清：舞台調査からみた北佐久郡内の歌舞伎芝居，千曲，Vol.2，No.6(1975)，昭和27年稿了
- 7) 大河直彌：生島足島神社の歌舞伎の舞台について，生島足島神社歌舞伎舞台，生島足島神社，昭和61年
- 8) 山下恭弘，林 静，松本直司：長野県の農村舞台調査—アンケート調査結果の報告を中心として—，日本建築学会北陸支部研究報告集，No.30，pp.333-336，1987.6
- 9) 山下恭弘，西田秀雄，中谷隆秀，松本直司：長野県の農村舞台研究1—麻積村の現地調査—，日本建築学会北陸支部研究報告集，No.31，pp.247-250，1988.6
- 10) 山下恭弘，西田秀雄，中谷隆秀，松本直司：長野県の農村舞台研究2—農村舞台の保存，活用について—，日本建築学会北陸支部研究報告集，No.31，pp.251-254，1988.6

(1989年9月10日原稿受理，1990年7月4日採用決定)